

YAMAKADO NEWSLETTER

NO.123

2010/02/20

山門水源の森を次の
世代に引き継ぐ会

2006年以來の積雪量で雪害木多数

北部湿原から総見山方面を望む (10/01/16)



コナラ (10/01/26)



エゴノキ (10/01/29)



ノリウツギ (10/01/29)



アカガシ (10/01/29)



ハンノキ (10/01/29)



ソヨゴ (10/01/22)



ミヤマウメドキ (10/01/22)

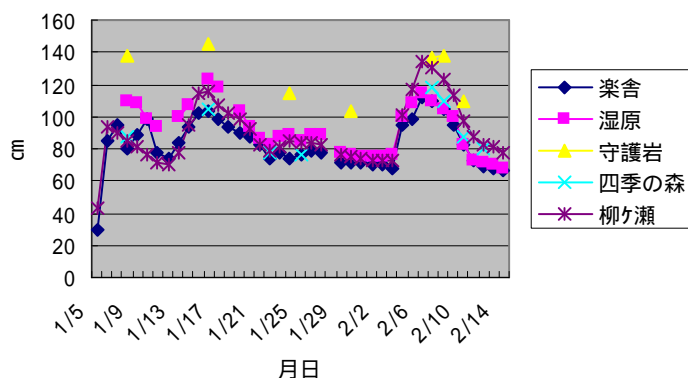


リョウブ (10/01/22)



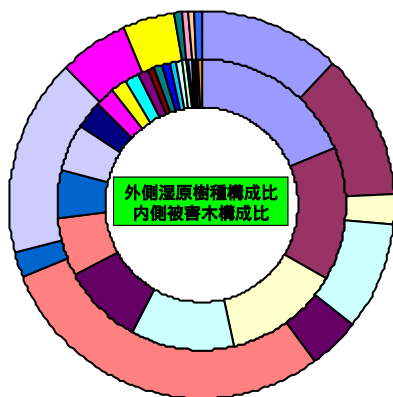
アカマツ (10/01/26)

今冬の積雪深



今冬の積雪は、2006 年以来の積雪深となった。2006 年は、湿原で 2m を超える大雪であったが、今冬の湿原の最高積雪深は、126 cm (1/16) となった。本年 1 月 5 日以降積雪深の連続観測を実施しその結果が左のグラフである。積雪深こそ 2006 年より少ないものの、着雪による樹木の被害は 2006 年の比ではなく甚大となった。余りにも被害木が目立つため湿原全域、四季の森、ブナの森観察コースでその被害状況の調査を実施した。まずこの雪害の発生した日については、日頃の定点撮影と現地観察から 1 月 6 日から 7 日にかけての降雪であることが明らかになった。さらに雪害は、樹種によって大きな差があることもわかった。左下の円グラフが湿原全域の調査結果である。外側が湿原の樹種の構成比を表し、内側が被害木の構成比を表している。湿原では、31 種 1974 株（このうち 100 株以上のものはミヤマウメモドキ：366・ノリウツギ：291・ソヨゴ：260・リョウブ：227・アカマツ：179・ハンノキ：130・エゴ：103・コナラ：103）が分布している。これらを被害率でみるとハンノキ 39 %、コナラ 28 %とダントツの被害である。湿原を代表するミヤマウメモドキの被害率は、6 %と極度に少なく日本海側の植物の性格が出ている。

湿原樹種構成比と被害木比



- ミヤマウメモドキ
- ノリウツギ
- ソヨゴ
- リョウブ
- アカマツ
- ハンノキ
- エゴ
- コナラ
- ネジキ
- クリ
- イソノキ
- シロモジ
- ヤマウルシ
- タニウツギ
- ウリカエデ
- コハナチカエデ
- ヤマナラシ
- ナツツバキ
- フメイシュ(不明種)
- アカメガシワ
- ヌルビ

湿原以外では、樹種構成が異なりコナラの構成比が高くなり、観察コースではコナラの被害が異様に目立つ結果となっている。また着雪被害で注目される植林（山門水源の森ではヒノキ）の被害率は1%にも満たない。被害木の標高に

よる違いも明瞭で、湿原からブナの森間が最も被害が大きい。このように今冬の着雪被害は、これまでの被害状況とは少し異なった特徴があった。



シカの遺体 (10/02/13)

シカの事故死

前号でニホンカモシカの遺骸が北部湿原で見つかったことを書いた。この遺体は、その後の積雪で埋まったものの主にタヌキがほぼ毎夜穴を掘り喰っている。タヌキの他にテン・キツネ・カラスが来ているものの大半はタヌキが喰っている。



カモシカの遺体を喰うタヌキ (10/02/16 4:30)



開花一番はハンノキの雄花 (10/02/10)

加えて 2 月 12 日新たにニホンジカ 4 才の事故死遺体が中央湿原奥の湧水部で見つかった。既に体の大半は主にタヌキが食してしまっており骨格が残っている状態であった。ほぼ全骨格が残っているので 13 日部位別に解体して楽舎横の沢に浸けて洗浄を行っている。これらの動物の存在はわかっていたものの、こうした生態画像が得られるのは固定カメラの威力である。春からは、更に 1 台設置したいものである。今回の成果は、3 月の報告会で披露されることになっている。

降雪と融雪が交差する 2 月の初旬になって、真っ先に咲き出したのがハンノキの雄花。ハンノキの下は雪面は、黄色く染まっている。続いて日当たりの良い場所では、バイカオウレンが咲き出し、ショウジョウバカマも蕾が膨らみだした。12 月に既にピンクま蕾だったイワナシは、未だその状態を維持している。